

遠藤周作『深い河』における悪の問題

緒方, 秀樹
佐賀工業高等学校

<https://doi.org/10.15017/1456047>

出版情報 : Comparatio. 17, pp.62-70, 2013-12-28. 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会
バージョン :
権利関係 :

遠藤周作『深い河』における悪の問題

緒方秀樹

一 はじめに

『深い河』は一九九三年、講談社より刊行された。私は最初この『深い河』を読んだ時、ヒンドゥー教のことを理解しなくては、この作品は理解できないと思い、平成八年にインドへ赴いた。そして、そこで改めてチャームンダーの重要性を感じることができた。

このチャームンダーが重要なことは、何人かの評論家も指摘している。たとえば川村湊氏は「天竺にあにまを求めて、『深い河』論」の中で、「遠藤周作のキリスト教信仰には、従来からマリア崇拜のような聖母信仰の傾向が強いと言われているが、そうしたマリア信仰、マリア観音信仰の底部にヒンズーの女神のように、醜く、悲惨な母への信仰があり、『深い河』では作者は無力な神、すべてを受容し、耐え、犠牲となる神としてのヒンズーの女神を見出したのである。」(註一)と言つて、チャームンダーをマリア観音と重ね、遠藤氏の神観を提示している。また、遠藤祐氏は『深い河』「その物語構造」の中で、「第二部に経過する諸状況の中で最も印象的なのが、『女神』の章の軸となるチャームンダー女神像との出会いの場面であることは、大方の読者の認めるところであるにちがいない。ヴァーラーナシイのホテル・ド・パリに入った

次の日、市内観光の一同を、江波は、留学体験に基づいて選んだ『特別』の場所に連れていく。それは『恵みをたれる女性』を意味するというナクサル・バガヴァティ寺であつて、寺院の地下室の壁に掘られたヒンズーの女神たちにまじる一体こそ、彼の目指すチャームンダー、物語が読者の視線をそこに集めようとする『女神』の像にほかならない。」(註二)とし、この『深い河』の構造においてチャームンダーが重要であることを指摘している。むろん両者の論はそれぞれに納得ゆくもののだが、『深い河』におけるチャームンダーの配置に目を向けようとはしない。また、チャームンダーがインドにおいてどのような理解がなされているのか言及しようとはしない。ここには当然情報入手が困難な状況があるわけだが、そこを明確にしてこそ『深い河』の本当の理解がなされると私は思う。

二 チャームンダーという女神

チャームンダーは、ヒンドゥー教の中でどういう位置付けの神なのか。この女神は、バラモン教には存在しない神である。仏教やジャイナ教という、反バラモンの宗教改革に対抗する、ヒンドゥー教に取り入れられた、もともとは地母神の女神なのである。

このバラモン教からヒンドゥー教への変化の特徴に、土着の身近な神々の取り込みと、その人格化がある。この変化には大乘仏教が大きく影響していると言われている。上座部仏教は仏陀個人の教えに対する信仰だったが、大乘仏教になると法身仏への信仰

へと変化し、仏が土着の神にまで教えを説くという思想が生まれる。この先住民族にとって歓迎すべき土着の神の導入は、大乘仏教が民衆に受け入れられる原因となった。これに刺激を受けたバラモン教徒は、大乘仏教に倣って土着の神をより積極的に取り込むのである。また、上座部仏教では認められなかった仏像制作が、大乘仏教においては認められるようになり、その影響を受けてバラモン教でも多くの神像を制作するようになる。これがヒンドゥー教の発生状況であり、この状況下でチャームンダーはヒンドゥー教へ取り込まれるのである。

バラモン教からヒンドゥー教へ変化する過程で、神々の地位も変化した。そして、その変化の中で、特にブラフマー神、ヴィシュヌ神、シヴァ神という三神が尊ばれるようになる。宇宙はブラフマー神が創造したが、それを維持するがヴィシュヌ神である。シヴァ神は既存の宇宙を破壊し、再生を願う神である。現在のヒンドゥー教は、このヴィシュヌ派とシヴァ派の二派に大きく分かれているが、後者のシヴァには多くの異相があると同時に数百の妻がいる。そして、その妻たちは優しい女神と恐ろしい女神に大別することができる。優しい女神で有名なものにはパールヴァティなどがあるが、ここで注目したいのは恐ろしい女神、シヴァのもつ暗黒面に対応する破壊と死を象徴する女神たちである。

この中で特に『深い河』に関連のある女神に注目すると、まずはドウルガーを挙げることができる。ドウルガーという名前は特に出てこないが、『深い河』でチャームンダーがあるというナクサール・バガヴァティ寺は、立川武蔵氏の『女神たちのインド』（註

三）によると、ドウルガーを祀る寺なのである。ドウルガーは「水牛の魔人を殺す女神」だが、困難から人を救う女神でもあり、ライオンを従えた美しい女神でもある。優しい面と恐ろしい面の両極を併せ持つ女神なのである。『深い河』にも出てくるカーリーは、このドウルガーから生まれる。神々の世界を支配しようとした魔人シムムバと戦うことになったドウルガーが、その怒りによつて顔が黒に変わるとそこからカーリーが生まれたという。カーリーはよつて黒い肌を持ち、好戦的で破壊と殺戮を楽しむ女神となるわけだ。

Dr. Pushpendra Kumar Sharma の *SAKTI and HER EPISODES* によれば、チャームンダーは、このカーリーの化身である。では、どのような過程を経てチャームンダーになったのだろうか。それは、アンピカーとスンバハの戦いにおいて、スンバハの家来のチャンドとムンダを、アンピカー側のカーリーが殺したので、チャンドイカーから「あなたはチャンドとムンダの命を奪ったので世界にチャームンダーとして知られるようになるだろう」と言われ、これ以後チャームンダーとカーリーが名乗るようになるのである。(註四)

もちろん、これは前述したとおり地母神の取り込みのために作られた神話であろうと推察することができる。

では、このチャームンダーはいかなる神なのか。墓場に住むチャームンダーは、カーリーと同じく破壊と殺戮を好む女神だが、カーリーと異なる点がある。ベヴァリー・ムーン編の『原型と象徴の事典』にこうある。「チャームンダーは害を及ぼすだけの女神

ではない。ヒンズー教徒は輪廻を信じている。生が終わると同時に死が巡るように、死は新しい生を約束する解放である。このような理由で、チャームンダーに殺される悪魔たちは、女神が自分たちを悪魔としての存在から解放してくれることを喜び、笑った手を合わせて拝んだりする。(註五)

死の世界へと導きながらも、新しい生を約束する神がチャームンダーなのである。

これらのことは、『深い河』を読む上で前提となる重要な知識であると思う。

三 遠藤周作によるこの時期の悪の定義

遠藤周作は、晩年、悪というものをどのように認識していたのだろうか。その考えが最も具体的に表れたと思う『私の愛した小説』を見てみる。

『私の愛した小説』とは、モーリヤックの『テレーズ・デスケルー』のことであろう。ここにはもちろんこの作品が例に挙げてあるが、『深い河』に出てくるジュリアン・グリーンンの『モイラ』も挙げてあるところが興味深いところである。モイラは主人公の青年ジョセフを誘惑するイブ的な存在である。それに対して「テレーズ」はどうだろうか。テレーズは夫に毒を飲ませるが、遠藤氏はそこから愛慾と宗教心理の相似形を見出し、「モーリヤックが言いたかったのはその相似形を利用して神が我々に働きかけてくるのだという点なのだ」と言う。テレーズはその意味で神を求め

ているとすることができよう。「罪と信仰とは類似形である」として「X」、つまりイエスへ繋がるものとしての「罪」を犯すのだ。しかしテレーズはそこに留まらず、やがて「寝そべる快樂」という悪に身をゆだねる。そしてそれが悪ということに気づかないモーリヤックはテレーズを救おうとしたが、それがかなわなかったと遠藤氏はいうのである。それを遠藤氏はフロムのいう「子宮の暗闇への退行」あるいは「ネクロフィリア」、フロイトのいう「死への本能(タナトス)」という本能から来るものと指摘し、それが「X」を求めない「悪」だというのだ。この「悪」は、本能であるがゆえに人間の力だけでは克服することができないと遠藤氏は語る。(註六) この悪の概念は、深層心理学的な観点から見た悪とすることができよう。

四 『深い河』の構造とユング心理学

この『深い河』は十三章から成っているが、登場人物の中で最も注目すべき人物は成瀬美津子である。その他の登場人物、妻を癌で失う会社員の磯部、肺結核の手術に際し、犬、犀鳥、九官鳥との会話から救われたと思っている童話作家の沼田、ビルマで人肉を食べた戦友塚田とポランティアのガストンとの会話を引きずる木口は、自分の人生の苦しみを同じインド・ツアーに参加したこの成瀬美津子に打ち明けるといふ筋書きになっている。また成瀬美津子自身もかつて誘惑した大津に惹かれ救われようとする。『深い河』のストーリーは、この成瀬美津子を中心に流れていく

のである。この構造については遠藤祐氏が『深い河』―その物語構造』においてすでに明らかにしている。(註七)

時系列に従って読むと、美津子は最初、仏文科の大学生として描かれ、遊び仲間からモイラというあだ名をつけられている。このモイラとは、ジュリアン・グリーンの小説『モイラ』のことだ。その美津子は、あだ名のごとく哲学科の内気な大津を誘惑する。モイラと同じく、空虚感から誘惑するのである。そして神に捕らわれた大津を神への挑戦として神から大津を引き離し、わがものとする、すぐにぼろ切れのように捨てる。これは神への反逆という悪なる行為である。大学を卒業した後、やがて美津子は前途有望な青年と結婚する。そして新婚旅行はフランスへ行くわけだが、社会的には認められているが月並みな感性の夫に疲労を感じるところは、モーリヤックの『テレーズ・ドスケルー』と設定が同じで、美津子自身も(昔はモイラ、今はテレーズ)と認識する。現在はテレーズであることを認識すると、フランスのリヨンにいるという大津に会いに行く。時は経て、彼女はすでに離婚をしていてボランティアという愛のまねごとをしている。空虚感を埋めようとしているのである。

この空虚感、ユングの『タイプ論』によれば「外向型」のタイプが陥りやすい状況である。「内向型」が自らの知覚や認識によって客体を捉えるのに対し、「外向型」は関心や行動の基準が客体にある。それゆえに自分自身を見失いやすく、虚脱状況になりやすい。(註八) 美津子は「外向型」のタイプであるために大学時代は遊び仲間に合わせて、結婚は社会的に認められた男と結婚し、そ

の結果、空虚感を感じているのである。

そして、「一体、何がほしいのだろう、わたしは……」と言って空虚感を埋めるために、印度へのツアーに参加する。美津子の大津への行為は確かに神を求めぬ悪なるものだが、その行為をした美津子の心は、その補償作用として個人的無意識を経て、集合的無意識の中に救いを求めようとしている。そして、その集合的無意識を構成する元型の一つにチャームンダーがあるのだ。

印度旅行はデリーからアールグラまでは一切省略され、舞台はアールハーバードから始まる。一行がこのアールハーバードに着いた時点で、既に「印度仏跡旅行」は四日が経過しているにもかかわらず、江波は改めて「我々は忘れていた別の世界に今から入っていくんです」と言う。そして、ヴァーラーナサイに着くと「彼だけが用意している特別のヒンズー寺院」であるナクサル・バガヴァティ寺に一行を連れて行く。そこには「さまざまの女神像」があるが、「ぼくの好きな女神像を見て下さい」とチャームンダー像のみを紹介する。江波は、「別の世界」である異界への案内人であり、作品内で狂言回しとしての役割を果たしているのだ。

五 反転する悪

作品内でチャームンダー像があるナクサル・バガヴァティ寺は、私のインド訪問の時のガイドや、三島由紀夫の『暁の寺』にも出てくるクミコ・ハウスの住人などによれば、ヴァーラーナサイにはない。

チャームンダーの所在をナクサール・バガヴァティ寺としたのは、バガという女性性器の意味があるからだと思われる。ユング心理学によれば、女性性器は生類を体内で育てる女性の象徴である。しかし、これは生類を生み、外界へ送り出すはずの女性性器が逆に生類を呑み込んでしまうという逆作用も象徴していると思われる。『深い河』のナクサール・バガヴァティ寺には地下がある。これはいわゆる「死の穴」ともいうべきものである。チャームンダーは死を司る女神だから、この「死の穴」ともいうべきところに住んでいなくてはならない。遠藤氏は加賀乙彦氏との対談「最新作『深い河』―魂の問題」中で、「あの洞穴はないです」と地下を創作したと告白している。(註九)

美津子はこのを訪れた時、「この街に来てよかったのは、あの暑さと息ぐるしさとで耐えた二十分だった」と思う。「あの暑さと息ぐるしさとで耐えた二十分」とは、集合的無意識と重なる「うす暗い地下」で、元型の一つと思われるチャームンダーとの出会いを指す。地下は無意識と重ねるために設定上、必要なのである。

この地下に住むチャームンダーは悪魔を死の世界へ引きずり込むわけだが、前述した『原型と象徴の事典』によれば、同時に悪魔としての存在から解放する女神なのである。(註一〇)

確かに殺生という行為は悪である。その意味でチャームンダーの行為は悪といえるだろう。この行為は遠藤氏が指摘したフロムのいう「子宮の暗闇への退行」、あるいは「ネクロフィリア」、フロイトのいう「死への本能(タナトス)」であり、「X」を求めな

い「悪」なのである。しかし、チャームンダーの行為は、「悪」の存在を殺すことによつて、その「悪」を別のものとして生かすという矛盾したものである。ここに遠藤氏のうれしい誤算があったと思われる。つまり、「子宮の暗闇への退行」、「ネクロフィリア」なもの、「死への本能(タナトス)」の向こうに「X」を見出したのである。この退行現象は、決して悪そのものではなかったのである。遠藤氏がかつて佐藤泰正氏に、サタニックなものは書けないと漏らしているが、結果としてそれは遠藤氏にとつて書く必要がなくなったと言ふことができると思う。悪は反転し、悪が悪でなくなったのだ。

『私の愛した小説』で遠藤氏はこう書いている。「ユングを読むことで、無意識をたんに抑圧したものの溜まり場所とみなし、そこを罪の温床と考えたモーリヤックやグリーンンの視点から、解放されたことは事実である。ユングをはじめ知った時、『助かった』という開放感をしみじみ味わった」。(註一一) この思いが『深い河』におけるチャームンダーの配置に反映しているのである。

添乗員江波はチャームンダーを前にしてこう言う。「彼女は聖母マリアのように清純でも優雅でもない、美しい衣装もまもっていません。逆に醜く老い果て、苦しみに喘ぎ、それに耐えています。この苦痛に満ちた眼を見てやってください。彼女は印度人と共に苦しんでいる。像が造られたのは十二世紀ですが、その苦しみは現在でも変わっていません。ヨーロッパの聖母マリアと違った印度の母なるチャームンダーなんです」。

この江波の持つイメージは『深い河』に引用された聖書の一節

彼は醜く、威厳もない。みじめで、みすばらしい

人は彼を蔑み、見すてた

忌み嫌われる者のように、彼は手で顔を覆って人々に侮られる

まことに彼は我々の病を負い

我々の悲しみを担った

この部分と重なり、これは遠藤氏がこれまで幾度となく言ってきた「同伴者としてのイエス」を想起させる。

六 実証後の新たな解釈

加賀乙彦氏との対談「最新作『深い河』―魂の問題―」にこうある。

『スキヤンダル』の次の純文学書下し小説として、この『深い河』を書きました。成瀬美津子という女性が『スキヤンダル』に出てくるのですけれど、はじめはその人物を主人公にしてずっと書いてたんです。しかし途中でやめてしまった。そして彼女も登場させるけれども、別に主人公を何人か増やし、大津という挫折した男を主人公にしました。この全員の共通した主題というのは、「失われた愛を求めて」彷徨うということになるのかな。人間の魂が探している愛です。そこでインド旅行と

いうツアー旅行の形態を取らせることになったんです。

悪の問題を真正面から一人の女主人公に取り組ませるという構想はやめてしまった。というのは悪の問題についての謎が、この小説の中では消化し切れないと思ひましてね。それでこのような形の小説にしようと思ったんです。

この遠藤氏の発言は、結局悪を扱っていたつもりが悪でなくなったので、悪を正面から扱うことをやめたという発言にとれる。

ここで再び成瀬美津子の人生を見てみる。彼女は（むかしはモイラ、今はテレーズ）と自分の人生を振り返る。昔は大津を悪へ誘うイブ的な存在だったわけだが、結果的にその行為は大津を神へ向かわせた。救う意志がなかったにもかかわらずである。この性質はカリーアの「悪」なる部分そのものである。

結婚後はどうだろう。テレーズ同様、俗な感性しか持ち合わせていない夫への失望感が彼女にある。しかしモイラと呼ばれていた頃とは違って何かを求めている。その何かとは「X」であり、イエスのことである。そして彼女の求めていく先には、汚れを清めると言われるガンジスという死の河があるのだ。彼女は登場人物を含め、人間の深い河の悲しみを知り、ガンジスに身を浸す。この行為は真似事だが、死へ向かうことによって救うという行為はチャームンダーの真似でもあるのだ。

昭和三十四年の『サド伝』にこうある。

サドはここに奇妙な矛盾を発見した。娘たちのもつ処女は神

の美と汚れのなさのイメージかもしれぬが、この地上にあつてはこれが男の肉欲をそそっているのである。処女たちはその純潔さによって男を罪に誘っているのである。しかも彼女たちはそれに気づかぬふりをなし、いかにも淑徳を装っている。処女はこの時、汚れなき神のイメージだけではない。それは肉欲の罪を誘う魔の力になっている。

サドはこの矛盾と処女の持つ偽善性に烈しい怒りをおぼえた。

(註一四)

この前の部分で聖母マリアを処女性の象徴として扱っているので、遠藤氏は聖母マリアのグッド・マザーとしての性質の、いわばシャドーの部分に偽善を見てサドが怒りを覚えたと解釈している。『深い河』ではテリブル・マザーとしてのカーリー、チャームンダーをこう解釈する。

女神カーリーには慈悲と共に邪悪があつたが、偽善はなかつた。女神チャームンダーには苦悩と病氣と愛とが樹の根のようにならみあつていたが偽善は存在してなかつた。(註一五)

今やテリブル・マザーの中にこそ真実の救いがあるとも言いたげである。

七 悪より救いに視点を転換させた遠藤

死に向かうことによる救いというものを考えると、遠藤氏はヒンズー教を信じ、転生を信じたと取る人もいるかもしれない。確かに一章の「磯部の場合」でも、シャーリー・マクレーンの「アウト・オン・ア・リム」という前世を求めるシャーリーの手記、ステイヴンソン教授の「前世を記憶する子どもたち」を挙げているところから、転生に高い関心があることが伺える。しかし、磯部は癌で亡くなった妻の生まれ変わりというラジニ・プラニルという少女をカムロージ村で見つけることはできない。あやしい占い師を通して結果は同じことである。ここで出てくるカムロージ村は実在する。ヴァーラーナスイの北東部ガジプールにある二十戸前後の小さな村である。ここはこの辺りで唯一の羊の産地である。ここで飼われた羊たちのほとんどはヴァーラーナスイへ運ばれる。ここから「迷える子羊」を想起し、死の河ガンジス河のあるベナレスへすべて赴く運命にあることを象徴的に遠藤氏が書いたと読むのは私だけだろうか。

とにかく遠藤氏はここできっぱりと転生を否定し、あくまでも死の向こうにすべてを受け入れるものを見ている。成瀬美津子による「悪」の救いは現世に留まっているのである。

佐藤泰正氏との対談『人生の同伴者』の中で遠藤氏はこう言う。

インドの女神には、半分人間を苦しめ苛み、あとの半分人間を救済するというような女神像がいくらでも美術館へいくとあります。ああいうかたちで生命というのがまずあつて、その後

ろにさらに大きな包んでくれる生命というものがあるような感じが、私はするのです。(註一六)

この最初の生命というのはチャームンダーを含む女神を指している。ここで『深い河』の中の美津子の感じたことを挙げてみる。

その人の上に女神チャームンダーの像が重なり、その人の上にリヨンで見た大津のみすぼらしい姿がかぶさる

(註一七)

これからすると、最初の生命の中にイエスが含まれてしまう。

そうすると「その後ろにさらに包んでくれる生命」とは、いったいかなる生命なのだろうか。美津子がガンジス河での沐浴で真似事の祈りをする時の描写にこうある。

彼女はこの真似事の祈りを、誰にむけているのかわからなかった。それは大津が追いかけている玉ねぎにたいしてかもしれない。いや、玉ねぎなどと限定しない何か大きな永遠のものかもしれない。玉ねぎなどと限定しない何か大きな永遠のものかもしれない。(註一八)

この「玉ねぎなどと限定しない何か大きな永遠のもの」が、「その後ろにさらに包んでくれる生命」なのだろう。遠藤氏の神観、世界観はキリスト教というよりユング的神観、世界観に捕らわれてしまった感がある。「玉ねぎなどと限定しない何か大きな永遠の

もの」とはユングの言うところのグレートマザーなのだろう。

結局遠藤氏の考えていた悪は悪ではなかったように思われる。

下降指向の向こうにも「X」は存在したからである。遠藤氏はこの『深い河』を書き終えた後で、悪についても一度定義し直す必要を感じたことだろう。しかし彼には時間がなかった。『深い河』創作日記の一九九二年九月二四日付け、

「万病一身に集まり、余命の少きを感じる」(註一九)

同十一月

「近藤啓太郎と電話にて会話。

『もう長く生きていたくない』と彼はこぼす。『朝、眼をさますと、今日も亦一日生きるのかとイヤになる』

同感だ」

(註二〇)

『深い河』の草稿の訂正段階ですでに闘病生活を送り、生きる気力をなくした遠藤氏は死と向き合い、己の問題として悪を追求するより救いを求めることのほうが先決だったのである。

〔註〕

- (一) 川村湊「天竺にあにまを求めて―『深い河』論」『國文学
 解釈と教材の研究(遠藤周作―グローバルな認識)』學燈社―
 九九三年九月) 六四―六九頁
- (二) 遠藤・『深い河』―その物語構造』(『遠藤周作―その文学
 世界』国研出版一九九七年十二月) 二七九―三〇三頁
- (三) 立川武蔵『女神たちのインド』せりか書房一九九〇年六月
 二四二―二六六頁
- 二四二頁に『バガヴァティー』とは女神の意味であるが、こ
 こではドウルガー、すなわち『水牛の魔神を殺す女神』を指
 している。』とある。また、二六〇頁には『バガ』は女性性
 器を意味し』とある。
- (四) Dr. Pushpendra Kumar Sharma, *SAKTI and HER EPISODES*,
 Eastern Book Linkers, 1981, pp62-64.
- (五) ベヴァリー・ムーン編『元型と象徴の事典』役者代表―橋
 本楨矩(新装版一九九八年三月) 二六八―二七三頁
- (六) 遠藤周作『私の愛した小説』新潮社一九八五年七月
 なお、『私の愛した小説』は、『宗教と文学の谷間で』という
 原題で、昭和五八年一〇月から翌年の一二月にかけて『新潮』
 に連載されたものである。
- (七) (一)と同じ
- (八) C. G. ユング『タイプ論』林道義訳 みすず書房
 一九八七年五月
- (九) 遠藤周作、加賀乙彦対談「最新作『深い河』―魂の問題―」
 『國文学 解釈と教材の研究(遠藤周作―グローバルな認
 識)』學燈社一九九三年九月) 六一―二二頁
- (一〇) (五)と同じ
- (一一) (六)と同じ
- (一二) 遠藤周作『深い河』講談社一九九三年六月
 三三五頁
- (一三) (九)と同じ
- (一四) 遠藤周作「サド伝」『遠藤周作文学全集9』新潮社
 一九七五年七月) 六三―一六三頁
- (一五) (一一)と同じ
- (一六) 遠藤周作十佐藤泰正『人生の同伴者』一九九一年一月
 一四六頁
- (一七) (一一)と同じ
- (一八) (一一)と同じ
- (一九) 遠藤周作『『深い河』創作日記』講談社一九九七年九月
 一二五頁
- (二〇) 遠藤周作『『深い河』創作日記』講談社一九九七年九月
 一三二頁